

調和しているのか、という問題も分析されなければならないであろう。

しかし、それは教育の直接的利益あるいは促成的効果を期待した場合のことであり、それはそれとして、開発途上にある東南アジア諸国においては重要なことであるが、教育の基本的意義——著者の言葉を借りて言えば、「教育はすべての市民の基本的権利であり、教育を“消費財”としてそれ自身のために拡大することが社会的に望ましいという高邁な原理」——も忘れてはならないのではないか。私は、著者の否定する「気楽な主義」（“消費財”としての教育を拡大すれば、“生産財”としての教育、つまり人的資本への投資も自動的に増大することになり、したがって発展を促進するであろうという考え）をも擁護したい。一見無駄にみえる教育も、何らかの意味で、必ず社会的・経済的發展の基礎となることを確信するからである。

著者は、ラングーン大学元学長で、現在はオックスフォード大学英連邦研究所のスタッフである。この論文は、文章の運びが雑なために、論旨のぼやけているきらいがある。なお、日米フォーラムの1963年8月号(23~34ページ)に岡村忠夫氏の邦訳が載っているが、必ずしも名訳とは言い難い。(高木英明)

「*mou: pan: hlwa*」 *cau? me khayain myanma sape phyan. pwa ye: at.in:* 1963年12月, pp. 317.

東南アジアの研究は、従来のように、専ら、欧米諸国の文献にのみ依存していた状態から、直接、現地語の資料を対象とする方向へと、変って来つつある。ところで、現地語の資料の内でも、地方出版物は、その存在が地味なため、一般に見落とされる傾向が強い。しかし、東南アジアは、一国の中でも、場所が変われば、住んでいる民族も異なり、話されている言葉も違うのが普通であるから、地方文化を反映するものとして、地方出版物の存在意義は、無視できない。この欄で、非学術的な地方誌を取りあげた理由も、そこにある。

*mou: pan: hlwa* は、北シャン州チャウメ郡ビルマ文学普及協会が出版している年刊誌である。地方誌とはいっても、執筆者は郡内居住者のみに限られているのではなく、広く外部に開放されているらしく、ウー・テインマウンや、ルー・ドゥ・ウー・フラのよう

に、一流の新聞、雑誌で活躍している著名人の寄稿もみられる。チャウメ町の特集記事は、流石に郷土問題を扱っただけあって、読みごたえがあった。行政的には、シャン州に編入されており、歴史的にも、シャン族藩侯の支配下にあったとはいえ、この町は、古くから、パラウン族によって、その発展が支えられてきた。この町の経済の中心は、茶である。ビルマ茶の大部分は、パラウン族によって栽培されてきたが、チャウメが、茶の売買によって成り立つ市場町である以上、その繁栄は、パラウン族と切り離しては考えられない。

*mou: pan: hlwa* は、全頁、ビルマ語のみであるが、シャン語、パラウン語等による各民族の特色を生かした記事も、できれば欲しいと思う。私は、昨年、名古屋大学の茶樹起源に関する学術調査団が持ち帰った資料の一つで、タウンジー県ピンラウン郡公安兼行政委員会から1962年に出版された「煙草、茶、うこんの地域栽培並びに販売法報告書」と題するパンフレット(ビルマ文)に目を通す機会を得たが、これも地方出版物の一つとして、特色豊かな内容をもっていた事が、記憶に残っている。現地語資料の蒐集は、今後、ますます重要性をましてくると思うが、首都を中心とした出版物だけでなく、地方出版物にも、関心を払う必要があると思う。(大野 徹)

МАУН МАУН НЬУН, И.А. ОРЛОВА, Е.В. ПУЗИЦКИЙ, И.М. ТАГУНОВА: *БИРМ-АНСКИЙ Язык* Москва 1963 pp. 122.

ソ連における東南アジア諸語の研究が、最近急速に進展しつつある事は、既に西田龍雄助教授(東南アジア研究第二号「ヨーロッパにおける東南アジア諸言語の研究について」)によって紹介されたが、この度「東洋及びアフリカ諸外国語」(ЯЗЫКИ ЗАРБЕЖНОГО ВОСТОКА И АФРИКИ)シリーズの一環として、待望久しい「ビルマ語」が公にされた。

この本の事は、1964年3月10日付のビルマ字新聞「*myanma. alin:*」紙上で紹介された事があり、私としても多大の期待をもっていたが、ようやく入手できたのでとりあげる事にした。

本書は、全六章から成り立っており、その構成は次の通りである。1. 序論 2. 音韻論 3. 文字組織 4. 形態論 5. 統辞論 6. 付録。この内、序論に